薬剤性パーキンソン症候群

小林製薬の紅麹（べにこうじ）事件は、関係のない医者にも迷惑な話だ。日々の診療にまで、ありがたくない影響がみられるのである。

56歳のK子さん。長く食事指導をしてきたが効果なく、高コレステロール血症が続く。服薬を勧めるが、「とんでもない」と一蹴された。「友人が、薬のせいでパーキンソン病になりかけたのよ。ほら、例の紅麹の、あれもコレステロールのサプリでしょ。薬はもっとコワイわ」ときたもんだ。コレステロールとパーキンソン病が、どこでどう繋がるのか、ボンクラ医者は理解に苦しむ。

それはともかく。K子さんの友人は、「薬剤性パーキンソン症候群」と診断されたのかもしれない。どんな薬を服用していたかは不明だが、飲み続けるうちに、歩きにくさ、手足のこわばりやふるえなどのパーキンソン病に似た症状が出たのであろう。

薬剤性パーキンソン症候群は、そう多いものではない。原因は、ドーパミンの作用を弱くするように働く薬剤のせいである。比較的頻度の高いものとして、一部の抗精神病薬や胃腸薬が知られている。が、よく使われる吐き気止めや降圧剤、片頭痛の予防にも使う薬でも起きたという報告がある。

だから、初めて使う薬なら何であれ、医者は異常なくらいに慎重になる。気の小さいワッシーなんぞは、最初の3週間に少なくとも3度以上は副作用を疑って診察する。薬剤性パーキンソン症候群は、内服後数日から数週間に起きるが、その90％以上は20日以内に発症するとされているからだ。

と、言葉を尽くすのだが、K子さんは頭を縦に振らない。紅麹の不安で頭が赤く染まったままの状態は、いつまで続くのだろうか？ま、待つしかないのだろう。無理強いして服薬させたものの、途中で通院まで止められたりしてはどうにもならぬ。

石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：　5/2北國新聞掲載